

# アマレヤとアイヌ女性の舞踏劇の理解のために

丸山 博



2019年のアマレヤとアイヌ女性の舞踏劇「(残)響 ポーランドと日本に架ける橋」は、アマレヤ劇団が日本とポーランドの国交樹立100周年記念事業の一環として、ポーランド文化・国家遺産省に承認されたプロジェクト「国境なき自立者:日本におけるポーランド」の中の一つのプログラムです。

日本側のパートナーは、2017年からコラボをつづける二つの団体、アイヌ女性会議メノコモシモシ(代表 多原良子さん)と国際研究センターCemipos (Centre for Environmental and Minority Policy Studies, 代表 丸山博)。さらに「指輪ホテル」芸術監督の白玉羊屋さん、コンカリーニョ理事長の斎藤ちずさん、さっぽろ自由学校「遊」事務局長の小泉雅弘さんらが実行委員に加わり、プロジェクトの準備が進められました。

舞踏劇はアイヌ女性の物語にアイヌとポーランドの音楽、アマレヤの踊りなどが重層的に重なって展開します。札幌・琴似のコンカリーニョで9月28日(土)に2回上演され、地元紙・全国紙が大きな記事を配信してくれたことも追い風となり、190名余りの方々に来ていただくことができました。

## アマレヤ劇団

アマレヤ劇団はポーランドを代表する独立劇団の一つです。2003年にカタジナ・パストウシヤク(カシャ) Katarzyna Pastuszek 博士とアレクサンドラ・シリヴィンスカ Aleksandra Śliwińska 博士らを中心にグダンスクで結成され、海外でも意欲的に作品を発表しています。また、日本の劇団解体社と長年共演し、国際共同制作にも参加する一方、身障者や薬物依存者らとの演劇プロジェクトにも取り組んでいます。

## グダンスク市

アマレヤ劇団の本拠地グダンスクはバルティック海に面し、古くから交易や造船業で栄えた港町です。歴史的には他国の支配に屈せず、最近では

ベルリンの壁の崩壊につながった連帯運動発祥の地でもありません。グダンスク出身のカシャは、その抵抗の歴史に誇りをもって、その思想を受け継ぎ LGBTQ、移民、マイノリティなどの権利擁護者としてポーランド社会をリードした、アダモヴィチ・グダンスク市長が2019年1月14日に暗殺されたときには大きな衝撃を受けていました。

## 私たちはなにを目指すか

最後に、舞台終了後の質疑応答で寄せられた、「内容がわかりにくい」という質問に対するカシャの回答を抄訳してみたいと思います。

《私たちは一つの筋の通った物語を伝えたいわけではありません。むしろ、観客の皆さんに体験していただきたいのです。私たちは皆さんの感情に訴え、反応を引き起こしたいと思っています。私たちポーランド人は自分が何者かをいつも考えています。ポーランドの歴史が権力者や体制によって絶えず書き換えられているからです。

今回の舞台では水田や小さな建物が望遠鏡を通した映像として映し出されます。その映像は少しぼけていて、望遠鏡をのぞいている人が焦点を合わせようとしています。それはパーフォーミング・アーツの際に私たちがよく用いるメタファー(比喩)です。大きな物語ではなく、「多様な個人の、様々なストーリーに焦点を合わせている」という意味なのです。

舞台上に小さな島をいくつか作りました。私たち人間は、離れ離れの島々に住んでいるからです。でも、それらの間に橋を架けることはできるのです。舞台で使われた糸はそうした橋のメタファーです。実際、糸はアイヌの工芸品にもポーランドの工芸品でも使われています。しかし、糸は細くて切れやすい。それはまた人間の口をふさぎ、声を殺します。しかし、同時に、人と人を結び、美しいデザインを紡ぎだすこともできます。こうしていくつかの意味をもつメタファーは、有機反応のように、多くの結びつきを生み出すのです。》



(まるやま・ひろし=写真上=室蘭工業大学名誉教授) 《第92回例会》2019.11.6より

写真(左)舞台(左から)後列 Yoshiko, Tsugumi, Ola, Kyoko, 前列 Kasia, Natalia, Kimiko (右)質疑応答:カシャと松平亜美(つぐみ) (写真 尾形芳秀)